鯖江藩の江戸屋敷について(一)

竹内信夫

はじめに

徳川幕府による参勤交代制度の確立によって、諸大名は江戸に屋敷地を拝領し、大名屋敷を造営していることは、よく知られていることである。

大名屋敷の種類には「上屋敷」・「中屋敷」のほか、郊外に置かれた「下屋敷」や「蔵屋敷」が造られ、大名が独自に確保する「抱屋敷」などがあった。大名家の江戸屋敷は、大名の格付等によって屋敷の規模にも相違がみられた。江戸屋敷の規模については、元文三年（一七三八）の幕府の高坪規定では一万から二万石で二五〇〇坪、五万から六万石で五〇〇〇坪、一〇万石から一五万石で七〇〇〇坪といった一応の基準があったが、実際には相対替、囲い込みなどを繰り返し、広大な屋敷を持つ大名もみられた。[1] このことについて具体的にみておくと、幕末の数字であるが上屋敷で最も大きいのは、加賀藩の本郷邸一〇万三八二二坪（富山・大聖寺両藩への貸地を含む）、次いで水戸藩の小石川邸一〇万一八三一坪であり、種類を問わず最大のものは、加賀藩の下屋敷板橋平尾邸の二一万七九三五坪であった。こうした大名屋敷に関しては、文献史料や絵図面がある藩も少なくなく、また、最近のいわゆる近世考古学の観点から大名屋敷の復元的研究が行われ、江戸屋敷での生活などが次第に明らかになりつつある。[2]

ところで、諸藩の江戸屋敷については、『東京市史考』（市街編）に「江戸藩邸沿革」としてまとめられている。[3] これは全国諸藩の約三分の二に過ぎないが、さいわい鯖江藩の江戸屋敷の変遷が収録されている。この記録はまずは体裁が整い、鯖江藩の江戸屋敷についてその概要を知る上では基本となるものである。本稿ではこの『東京市史考』「江戸藩邸沿革」（以下「江戸藩邸沿革」と記す）を中心に、鯖江藩の江戸屋敷について歴史的変遷とそれぞれの屋敷について整理と考察をすすめたものである。

一　鯖江藩江戸屋敷の歴史的変遷

表一は鯖江藩江戸屋敷の歴史的変遷をまとめたものである。便宜上、屋敷を上屋敷、中屋敷、下屋敷の順に所在地、坪数、取得の方法、その後の経過などを編年的に示した。出典は「江戸藩邸沿革」や「間部家譜」[4]、「亨浄院様御実録」[5]などである。

なお、間部家が屋敷を取得する宝永・正徳期に鯖江藩は成立していないので、この期の間部家の屋敷を「鯖江藩の江戸屋敷」として考えることに対して異論がでるかもしれない。しかし、間部家は鯖江藩主につながるものであるから一連のものとして捉えることにした。また、江戸屋敷の取得年月日や坪数が史料により異なるものもみられるが、これについては「間部家文書」[6]に記載されている年月日などを参考にしたが、とくにその旨を注記していない。以上の二点についてはじめにお断りしておきたいと思う。

（一）上屋敷

それでは上屋敷の方から述べておく。鯖江藩主（初代）となった間部詮言の養父（実兄）

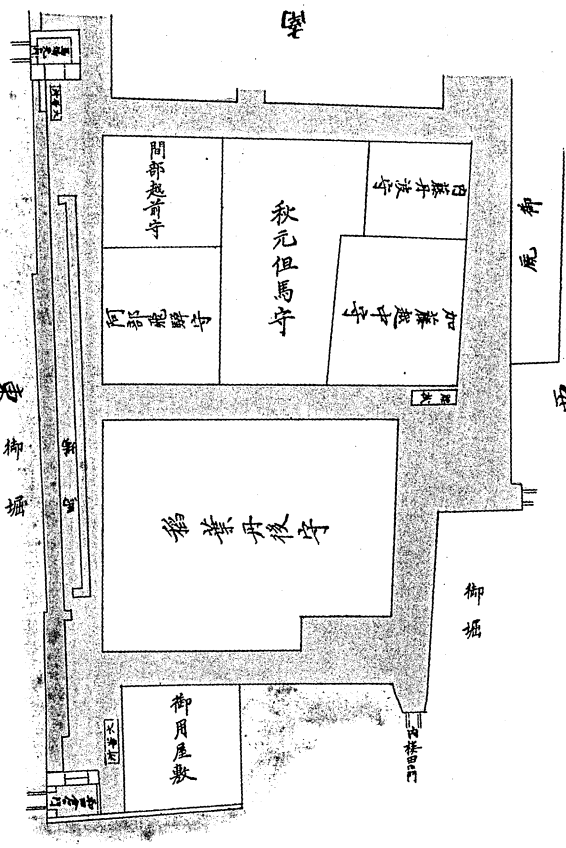
表1　鯖江藩江戸屋敷の変遷表

	上屋敷	中屋敷	下屋敷	
宝永元年(1704)	12/11拝領 馬場先門内 青山備前守上り屋敷(2615坪)			
3年(1706)	5/15拝領 馬場先門内 松平伊賀守上り屋敷 11/15添地拝領 西丸下 柳生備前守上り屋敷(3254坪)		2/5下屋敷拝領 2/29拝領 青山百人町 (5000坪)	
4年(1707)		7/21拝領 元矢の倉浜町 米倉丹後守上り屋敷(3529坪)		
5年(1708)				9/11拝領 下大崎猿町 堀式部上り屋敷(16681坪)
7年(1710)	3/15添地拝領 西丸下 安藤信濃守・平岡和泉守 上り屋敷(3202坪)			
正徳2年(1712)			1/26相対替 下谷長者町 松平三四郎より屋敷を得る (6200坪)	
4年(1714)		1/4相対替 浜町(酒井与九郎・森川金右衛門両屋敷(3257坪)を得、下谷長者町は酒井・森川へ渡す。但、3257坪、引料250両×2)。		
5年(1715)		4/27添地拝領 浜町 牧野備後守上り屋敷(4765坪)		
享保元年(1716)			2/3相対替により 関口目白 萩原近江守上り屋敷を得 (6434坪)	
2年(1717)	2/2拝領 三田小山 毛利飛騨守上り屋敷 (6572坪)		1/ 下谷長者町が上地	
6年(1721)			5/12関口目白が上地	
9年(1724)		4/26切坪上地(浜町添地の内) 1300坪を間部隠岐守へ渡す		
15年(1730)		8/4相対替により 代々木 2900坪を得、加納遠江守へ3400坪(浜町添地の内)を渡す	代々木 2900坪	
元文2年(1737)				10/26相対替により 品川大井鮫頭(16681坪)を得、松平陸奥守へ16681坪を渡す
延享3年(1746)		5/ 切坪上地 安中藩(板倉家)へ3374坪を渡す 11/21相対替 四谷角筈 4200坪を得、西尾隠岐守へ3370坪を渡す		
宝暦元年(1751)			12/18相対替 本芝一丁目 2600坪を得、中根大隅守へ2900坪を渡す	
天保11年(1840)	1/17拝領 大名小路 松平左京亮上り屋敷(5000坪)			
12年(1841)	6/5拝領 辰之口 太田新六郎上り屋敷(4000坪)			
14年(1843)	7/16拝領 西丸下 井上河内守上り屋敷(4000坪) 11/8拝領 常盤橋門内 久世大和守上り屋敷(3650坪)			
嘉永7年(1854)			11/16本芝一丁目が上地	
安政2年(1855)			3/14拝領 浜町 牧野備前守下屋敷 2000坪	
5年(1858)	7/6拝領 西丸下 松平伊賀守上り屋敷(8353坪)			
元延元年(1860)	閏3/3拝領 外桜田 久世大和守上り屋敷(4382坪)			
元治元年(1864)			10/14浜町が上地	
2年(1865)	3/1拝領 西久保切通 水野出羽守屋敷(5814坪)			
明治3年(1870)	7/25 西久保切通(5814坪)	明治(年月日不詳) 四谷角筈が上地		品川大井鮫頭(16682坪)

の間部詮房が江戸ではじめて屋敷を拝領したのは、宝永元年（一七〇四）である。「間部家譜」に

宝永元年甲申年十一月五日、文昭院様西丸御移徙ノ供奉ニ列ス。同年十二月九日、御書院番頭格仰付ラレ、御役料千俵下シ置ル。従五位下ニ叙シ越前守ト改ム、同年同月十一日、馬場先御門内青山備前守上リ屋鋪拝領

とあるように、文昭院（徳川家宣）が将軍継嗣として江戸城西丸に入ると、その臣である詮房も奥番頭（書院番頭格）となり従五位下・越前守の叙任を受け、十二月十一日、「馬場先門内」で屋敷を拝領したのである。馬場先門は、江戸城城門および見附の一つで、この一帯には老中、若年寄在職中の大名の役宅（御用屋敷）が立ち並ぶところであった。詮房はその馬場先門内において屋敷（二六一五坪）を拝領したのである（図一）[7]。



（図１）宝永元年12月拝領馬場先御門内屋敷位置図

（「御府内往還其外沿革図書」）

宝永三年（一七〇六）一月、詮房は若年寄格、老中次格となり、大名（高一万石）に取り立てられ、同三年五月には同じ馬場先門内で屋敷を拝領している。同年十一月には馬場先門内を返上、つまり上地となり「西丸下」で添地（三二五四坪）を拝領している。さらに同七年三月には「間部越前守居屋敷差狭リ候ニ付、添地被下之」とあるように[8]、「西丸下」で三二〇〇坪余を添地として拝領している。このように江戸城近くの馬場先門内や西丸下で屋敷を拝領したということは、詮房の幕閣におけるめざましい活躍によるものであることは相違ないものと考える。

さて、間部家の西丸下の屋敷は享保二年（一七一七）二月に上地となり、その代地として「三田小山」に屋敷が与えられた。「従江戸到来御用状」[9]によると、

一筆申入候、昨朔日御老中様御連名之

（図２）鯖江藩上屋敷（三田屋敷）位置図

中央に「間部下総」とあるのが三田屋敷。江戸城（大手）まで23丁（『文化武鑑』）のところ。屋敷の西には「古川」が流れる。

図の上部（北）にある寺院は増上寺である。現在の東京都港区。

御奉書を以、今日殿様被為召就御用御上屋敷被召上、於芝毛利飛騨守様上リ屋敷御拝領被遊候、坪数六千五百坪余御本家・御長屋共ニ結構ニ有之由ニ候

とある。この屋敷は徳山藩毛利元次の屋敷で、坪数は六五七二坪であった。[10] このように、詮房が三田に屋敷を拝領した享保二年という年は詮房にとって特別意味のある年であった。周知のように、詮房は家宜の将軍職襲継とともに、老中格、側用人となり、上野高崎（五万石）を領有し、城主にまで出身をとげ、家宜没後には幼将の家継を補佐し、幕政推進の中心的人物であった。しかし、徳川吉宗が八代将軍となると、詮房は罷免され越後村上（五万石）に転封を命じられたのである。まさにこの時、三田小山で上屋敷を拝領したのである（図二）。[11] そこでこの期に詮房が江戸で上屋敷を拝領したということに注目しておかなければならないと思われる。芥川家文書「文献掇遺」[12] によれば「御屋鋪　三田小山六千五百七十二坪毛利飛騨守様元屋鋪享保二年二月二日御拝領、同月十一日西丸下ヨリ御移、前年五月十六日御役御免ヨリ此日マテ旧邸ニアラセ玉フ、当時ノ御優待コレヲ准テ奉察ヘシ」とある。これは「御役御免」となった詮房は享保二年二月十一日まで旧邸（西丸下屋敷）に留まり、その後、三田において屋敷を拝領したことを示しているもので、まさに「当時ノ御優待コレヲ准テ奉察ヘシ」の言葉のように、特異な例といえるのである。三田屋敷は図二に見られるように「古川」の東、二の橋の東詰から日向坂に面し、近くには綱坂があった。古川に架かる「二の橋」は俗に「間部橋」と称されていた。[13] 間部家の屋敷があったから、そのように呼ばれたのであろう。

ところで、鯖江藩八代藩主間部詮実は『私弟坪数』[14] なる記録をのこしている。このなかで三田屋敷の景観について以下のように記す。

「大木多くして盛夏の比ハ萬葉千枝、鬱々森々たり、中にて奇なるハ檉柳、高野槇、木槲の大木なり、先代主膳正詮允の比迄ハ狐狸変化の怪談ま、ありて、他家にてハ妖怪邸と称して最恐怖せし程なりしが、忝なくも父下総守詮勝、日夜丹精を描んで、法華経祈誦し賜ふ、信心の功徳にやよりけん、怪異の事ハ果と止ぬ」

としている。他家からは「妖怪邸」と称され周辺一帯が恐れられていたことなど興味深いことが記されている。この三田屋敷は結果的にみれば、七代藩主詮勝の時代まで鯖江藩の江戸上屋敷として長い期間にわたって使用されていたのである。

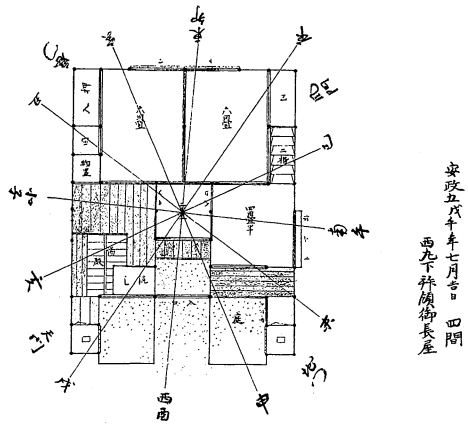
さて、この三田屋敷は天保十年（一八三九）十二月に上地となり、翌十一年一月、代地として江戸城近くの「大名小路」に屋敷替えがあった。この一帯は有力大名の藩邸が続いていたので「大名小路」の名称がある。この屋敷の坪数は五〇〇〇坪坪余で、前掲「私弟坪数」は「この邸、庭に泉水ありて、両岸に柳の大木あり」としている。

これ以降、鯖江藩上屋敷の変遷は以下にみるように、めまぐるしいとも思える屋敷替がみられた。すなわち、天保十二年（一八四一）六月には大名小路と引替に「辰之口」で屋敷を拝領している。詮勝の役屋敷で、坪数は四〇〇〇坪余であった。

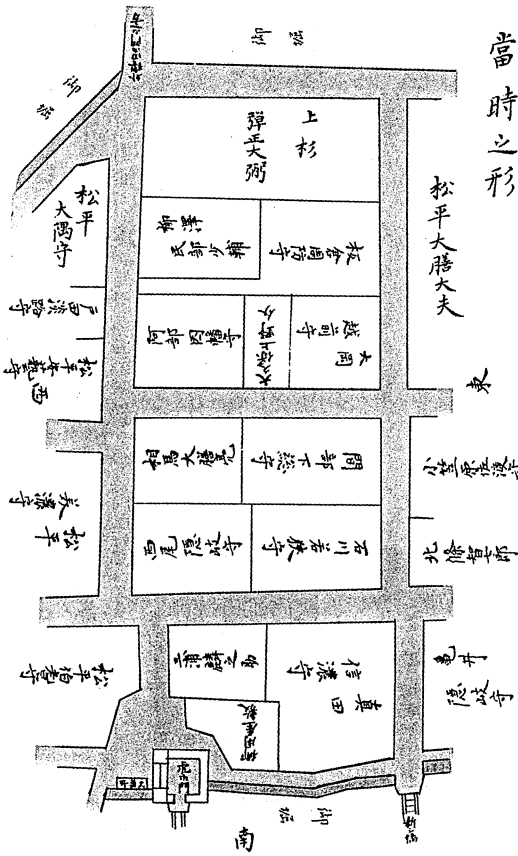
天保十四年（一八四三）七月には辰之口が上地となり、代地として「西丸下」で屋敷を拝領している。この屋敷も詮勝の役屋敷とさ

れ、坪数は四〇〇〇坪余であった。前掲「私弟坪数」に「この邸、庭ひろくして、長屋向セまし、大池ありて景色よし」とある。この屋敷の拝領期間は三ケ月半という短い期間であった。つまり、この年の十一月には西丸下が上地となり、その代地として「常盤橋門内」で屋敷を拝領している。「間部家譜」に「度々御屋敷御入替り二付、為御手当金千両被遊御拝領候」とあるように、頻繁に屋敷が入れ替ることに対し手当てが与えられている。常盤橋屋敷の坪数は三六五〇坪余であった。

安政五年（一八五八）七月には常盤橋門内が上地となり、代地として三たび「西丸下」で屋敷を拝領している。坪数は八三五三坪であった。この屋敷について前掲「私弟坪数」に「この邸、庭ひろくして、仮山、或ハ大きなる泉水ありて草木多し（中略）。この邸にハ馬場二ケ所ありて、湯屋・蕎麦屋等あり、最めづらしき事也」などと記している。大名屋敷は一般に遊興のため趣向をこらした広大な「回遊式庭園」様式を持つものであったが、[15] 鯖江藩の屋敷も本稿において引用した「私弟坪数」によると、庭には池が配され、さまざ



（図３）西丸下拝領長屋図



（図４）万延元年閏３月拝領外桜田屋敷位置図
（「御府内往還其外沿革図書」）

まな草花を観賞することができる回遊式庭園であったことを読みとることができる。

図三[16]は西丸下の屋敷における長屋の図である。具体的な規模はわからないが、二階建ての四間長屋であったことがわかる。江戸屋敷には常府の者と、国元から参勤で出府し、一、二年で帰国する江戸詰（勤番士）の別があったが、多くの藩士らはこのような長屋で生活していたのである。

万延元年（一八六〇）閏三月には、西丸下の屋敷が上地になり、代地として「外桜田」で四三八二坪を拝領している（図四）[17]。この外桜田屋敷は、元治二年（一八六五）三月に上地となり、「西久保切通」に屋敷を拝領している。この西久保切通の屋敷が鯖江藩としては最後の上屋敷となるものである。坪数は五八一四坪余で、ここには平屋の住宅や二階建の長屋、それに土蔵が六ヵ所、物置・厩などが配置されていた[18]。その場所を確認しておくと、図二「鯖江藩上屋敷（三田屋敷）位置図」にみえる増上寺の西に位置する水野（越前）家屋敷の一部が後に鯖江藩最後の上屋敷となったのである。したがって、鯖江藩上屋敷であった元三田屋敷[19]とは比較的、近い場所に位置していたのである。以上が鯖江藩の江戸屋敷のうち、上屋敷の変遷である（以下、次号）。

註

①大名屋敷は上・中・下屋敷とも頻繁に移動が繰り替えされた。公的なものとしては大名の幕府における役職の異動による屋敷替がみられたが、私的な屋敷替もあった。大名同志で相談し、幕府の許可を得たうえで屋敷を交換するケースが多く、これを「相対替」（「唱替」）と呼んだ。交換が一対一では済まず三軒の場合は「三方替」、四軒の場合は「四方替」と呼んだ。また、「囲い込み」は、隣地を囲い込み自分の屋敷地にしていく方法。

②平凡社『日本史大辞典』「大名屋敷」の項（宮崎勝美氏執筆）。なお加賀藩の上屋敷本郷邸については『加賀殿再訪』（二〇〇〇年六月、東京大学出版会）など参照。

③『東京市史稿』市街編第四九所収。一九六〇年、東京都編。「江戸藩邸沿革」には越前・若狭の諸藩では福井藩と鯖江藩についてのみ「藩邸沿革」が記されている。

④「間部家譜」鯖江市旭町植田家文書（『鯖江市史』別巻所収）。

⑤「亨浄院様御実録」鯖江市旭町植田家文書（『間部家文書』第一巻所収）。

⑥「間部家文書」は鯖江市長泉寺町鯖江市資料館蔵。「鯖江藩日記」、「従江戸到来御用状」「藩校教科書」など約二九〇〇点。

⑦『江戸城下町変遷絵図集』二巻（一九八五年、原書房）

⑧前掲『東京市史稿』「江戸藩邸沿革」。

⑨「従江戸到来御用状」享保二年二月二日付六番用状。

⑩三田屋敷については七六〇〇坪説もある。

⑪「文政十一年分限江戸大絵図」（一九七九年、『新修港区史』付図）の一部。

⑫奈良県北葛城郡王寺芥川家文書。

⑬『東京案内』（下巻）一九〇七年、東京市役所発行、東京市史編係編。

⑭鯖江市旭町植田家文書。『私弟坪数』は鯖江藩邸に関する地名や由緒を記したもの。

⑮白幡洋二郎著『大名庭園』（一九九七年、講談社）参照

⑯旧石井家文書（鯖江市資料館蔵）。

⑰前掲『江戸城下町変遷絵図集』五巻。

⑱鯖江市旭町植田家文書による。

⑲芥川家文書「文献掇遺」では、元三田屋敷について「間部元屋敷」と図示している。